

擬似出来事の物語作用とその〈外部〉

——テレビにおける教育報道の脱物語化——

The Narrative Effect of Pseudo-Events and their Counterpart: De-narrativation of TV Reports on Education

加藤 隆雄・紅林 伸幸・越智 康詞・酒井 真由子

Takao KATO, Nobuyuki KUREBAYASHI, Yasushi OCHI, Mayuko SAKAI

要 旨

テレビが報道する出来事は、ノン・フィクションとして構築された出来事、擬似出来事である。それは、物語構造を有しており、視聴者はテレビによって視聴者として起動・参加させる装置の下で、物語に巻き込まれてしまう。こうした物語のなかでも、教育出来事にかかわる物語は、読者を強く巻き込むことができる。そしてまた、擬似出来事は多元的現実の一つとして、夢の特徴と共通した特徴を有している(想起と忘却)。しかし、他方で、テレビが提供するこうした擬似出来事は、電子ネットワークコミュニケーションの台頭によって大きく変貌している。電子ネットワークコミュニケーションが行う対抗的・交渉的解釈によって、擬似出来事の物語性が露呈しやすくなると同時に、電子ネットワークコミュニケーションが公共性の空間としての可能性も有していることが指摘される。

はじめに

筆者らはこれまでの教育(言説)研究が、その自己観察を媒介し構成するメディアに対して十分意識的でなかったことを指摘し、教育言説(教育世論)の構成が、いかにマスメディア、とりわけテレビメディアのメディア特性(バイアス)に影響を受けるのかについて検討を重ねてきた(酒井・越智他 2016)。さらに、筆者らがテレビメディアのメディア特性について検討を行う背景には、メディア作用の政治的意味(市民を要求する民衆へと転換して脱政治化する作用)を問うという問題関心がある(加藤・越智 2014)。これらの研究においても、マスメディアが現実構成を支配すると考えるメディア決定論への批判を行ってきた。テレビが現実構成において力を持つためには、そもそも多くの人々にテレビを視聴してもらわなければならない。先の論考(酒井・越智他 2016)では、民放において、その報道内容が事件報道や道徳的言説に偏る傾向があることを指摘し、視聴者がテレビに依存するだけでなくテレビもまた視聴者に依存し、脱政治化(感情共同体化)していく傾向があることを示した。テレビが夢であるのは、テレビが視聴者の欲望を(マーケティングを通し

て) 必死で映し出そうとしているからである。これは閉じた循環である。この循環の外に出ることはいかにして可能なのか。本稿は、テレビの産出する擬似出来事とその物語・現実構成作用を検討することで、2000 年以降急速に拡大した電子ネットワークコミュニケーションがマスメディアに対してとる関係とその可能性を示そうとするものである。

1. 物語化された「ノン・フィクション」

6 月 23 日は沖縄慰霊の日である。平成 27 年 6 月 23 日、普天間基地の辺野古移設問題や安保法案改定問題で注目が集まるなか、沖縄で全戦没者追悼式が行われた。しかし、私たちの多くはそれを実際に見ることはできない。なんといっても、式典が行われたのは沖縄だ。平日の昼間に、遠く離れた沖縄で行われた式典に参加することは容易ではない。

しかし、そうであるにもかかわらず、私たちは、平成 27 年 6 月 23 日の 12 時から、沖縄・那覇で全戦没者追悼式が行われたことを、事実として知っている。テレビ、新聞、ネットで、そのことが報道されているからである。とりわけテレビは、生中継の（あるいは録画であっても）リアルな映像を私たちに呈示してくれる。しかし、そのリアルな映像は、本当にリアルなのだろうか。ピエール・ブルデューは『メディア批判』の中で以下のように述べている。

テレビは、隠しています。それが行っているとされていること——つまり情報を与えること——をするためには見せなければならないはずのものとは違うものを見せることによって隠しているのです。あるいは見せるべきものを見せるとしても、人々がそれを見ないようなやり方で、あるいは現に見せているものが意味を持たないようなやり方で見せることによって見せることによって、隠してしまうのです。あるいは、見せているものが現実とはまったくかけ離れた意味を帯びるように構成することによって、かえって隠してしまうのです。(Bourdieu 1996: 訳書 27)

当日の我が国のテレビが、沖縄慰霊の日をどのように「見せた」のかを、具体的に確認しよう。

テレビ朝日のアンカー番組である『報道ステーション』では、大雨の被害に関するニュースに続いて、ほぼトップニュースの扱いで、沖縄全戦没者追悼式の式典に関する特集を組んだ。タイトルは、「70 年目の沖縄慰霊の日 忘れられない……不戦誓う」、三線を奏でながら男性が吟じる沖縄民謡に続き、沖縄戦の映像とともに翁長雄志沖縄県知事の追悼の言葉が流れ、知事が基地問題に言及したことが紹介された。続いて、安倍晋三総理大臣が挨拶を行い、沖縄の基地負担軽減への努力を誓う。総理の挨拶には観客から「帰れ」のヤジが浴びせられる。平和の礎への弔問者である戦争を生き抜いた四人の市民の言葉が紹介された後、礎に刻まれた無数の名前の映像を前に、古館伊知郎キャスターが式典で高校生の知念捷さんが読み上げた創作詩「みるく世がゆやら」の一部を紹介する。カメラはスタジオに戻る。いつものキャスター・デスクに座る古館キャスターと解説者の立野純二朝日新聞論説副主幹が基地問題の歴史と現状を解説する。引き続き本日の特集として用意された日米地位協定の不条理に関する特集が始まる。イタリア駐留の米軍の現状、ドイツの地位協定改定の交渉過程などが紹介され、本土と沖縄の認識の溝、政府と市民（沖縄県民）との認識の溝を指摘し、沖縄慰霊の日の報道は終わった。

他局のケースも見ておこう。日本テレビのアンカー番組、『ニュース Zero』では、タイトルコー

ルの後、村尾信尚キャスターが、かつて琉球王朝の政治文化の中心であり、戦時中は陸軍の司令部が置かれ激しい戦闘の場となった沖縄首里城の前で、今日が沖縄慰霊の日であることと、番組内でミュージシャン宮沢和史に沖縄戦と平和への願いを込めた島唄を歌ってもらうこと、本日の企画が沖縄戦の悲劇と沖縄のこれから考えることであることを紹介した。首里城から夜景的那覇市内を見下ろし、「基地問題で進む「開発」経済効果は？」というテロップのもとで、村尾キャスターが、現在も在日アメリカ軍の専用施設の74%が集中している沖縄の基地をめぐる新たな動きを取材したことを語る。特集の冒頭は、式典での市民の声だ。『報道ステーション』が碑を訪れたお年寄りの過去を語る言葉に焦点をあてたのに対して、『ニュース Zero』は子どもに向けて語られた言葉を紹介する。続いて、翁長知事の辺野古移転中止の訴えを紹介、続く安倍首相の挨拶に関しては、安倍首相に浴びせられた式典参加者からの「帰れ」の声と、安倍首相の普天間基地の固定化はあってはならないという言葉を取り上げ、基地移転の考えに変わりがないことが紹介され、特集が始まる。特集では、基地移設がもたらす経済効果、キャンプシュワブ前での辺野古移設の抗議活動、基地受け入れについての住民の声、普天間基地が世界一の基地であり、基地返還後の経済効果について沖縄の人たちも意見が分かれていることが紹介された。

一見対照的な2局の報道であるが、2つのテレビ報道は同じことを行っている。たとえば、情緒的な取り込み、感情の操作、リアリティの情報化/二次情報化、番組を通じての情報のコード化、等々。同じことを行っているがゆえに2つの局は組織的に、まったく対照的な物語の中に視聴者を引き込むことができる。礎のもとに集まった人々の声から、過去から今に至る沖縄の人々の思いを作り上げることも、未来志向のメッセージを作り上げることも同じことである。おそらく、平成27年の式典のメインイベントとして記憶されるであろう「みるく世がゆやら」を読み上げることも、基地問題を経済問題とした特集を組むことも、特別異例なことを行っているわけではない。それがテレビ報道なのである。テレビ報道は、映像、音声、文字を駆使し、容易に、そして巧妙に、あたかもそれが紛れもない唯一絶対の事実であるかのような「ノン・フィクション」を作り上げる。

6月23日を基地問題に焦点化して取り上げた『ニュース Zero』は、番組全体を表1のように構成している。番組の後半で、予告通り、宮沢和史が島唄を歌う。地元の三線の演奏に乗せて島唄は歌われる。島唄の歌詞に宮沢が沖縄の人々の深い思いを込めたことが紹介されるが、画面に流れる歌詞は沖縄の方言であり、ほとんどの視聴者はその意味を知ることはいできない。視聴者がこの映像から得る情報は、島唄が沖縄の人々に支持されているということである。沖縄の人々が支持した島唄を、『ニュース Zero』は、感情が経済行為にすり替わることを象徴するツールとして用いた。したがって、6月23日に『ニュース Zero』が取り上げるものは、感情を詠う「みるく世がゆやら」ではなく、感情を歌う島唄でなければならなかった。『ニュース Zero』が記述する6月23日の「ノン・フィクション」は23日以前に決まっていたのである。映像は、視覚的に視聴者の経験呼び起こし、共通感覚を喚起し、バーチャルな情動的空間をつくりだすことができるのである。

表1 『ニュース Zero』（平成 27 年 6 月 23 日，23：00～23：59） 日本テレビ

カット 番号	カット	カットの概要
1	慰霊の日と特集「沖縄戦の悲劇と課題」紹介	
2	本日の内容	
3	関東地方 激しい雷雨	
4	クマ騒動 別のクマ	
5	特集 基地返還で進む開発の経済効果	
		特集の説明
		式典のビデオ映像 碑に祈る親の声
		翁長知事の挨拶
		安倍首相の挨拶
		特集ビデオ 米軍基地の歴史
		基地の経済効果
		沖縄市民の声
		基地の経済効果に関する 2 つの見解
6	特集 タトゥーを消す健康被害	
7	あの戦争を知る 宮沢「島唄」	
		宮沢の取材
		三線を学ぶ小学校 戦争の記憶を語り継ぐ 島唄
		村尾キャスター 語り
		「今も戦争の中にいる。本当に戦争がなくなれば基地はいらない。」
8	スポーツニュース	
9	ピックアップ トヨタ女性役員逮捕など	
10	天気予報	
11	Zero ヒューマン	
12	慰霊の日についての村尾キャスターのコメント 「沖縄住民の静かな語り口を思い違えてはいけない。」	

2. 擬似出来事の支配とマスメディアの〈外部〉

情報環境が、政治的な意味作用を有していることは、ウォルター・リップマン『世論』（Lippman 1922）において早くも提起されていた。人間にとって言語という情報メディアがすでに「擬似環境（pseudo-environment）」として、外的な環境の縮約＝単純化と特徴の強調＝歪曲を含んでいる。今となっては脱政治化された意味合いで用いられることの多い「ステレオタイプ」という用語こそは、情報メディアの持つ変形作用を指し示す用語である。

主要なマスメディアがラジオからテレビに移行する時期のマスメディア批判は、アドルノの文化産業批判、ラザースフェルドの視聴者研究、マクルーハンのメディア研究に代表されるであろう。¹⁾以来、現代にいたるまで膨大な蓄積のあるマスメディア研究のうち、本稿の問題にしたがって、視聴者による世界の解説のしかたに対するマスメディアの働きかけを批判的に検討した理論を概述しておきたい。

リップマンの「擬似環境」は、マスメディア発達以前に、情報メディア（言語）の特性として提起された概念であったが、テレビというマスメディアが発達した1960年代に、ダニエル・ブーアスティンが「擬似出来事 (pseudo-event)」²⁾ という概念に発展させた (Boorstin 1962)。テレビをはじめとするマスメディアは、出来事 (event) を、編集され単純化されよりわかりやすい情報へと変形・縮約している。たとえ当事者であっても、マスメディアの報道においてわかりやすく語られた「ノン・フィクション」に自らの体験を重ね合わせてしまうのである。前節で取り上げた沖縄慰霊の日の報道は、当事者の体験や出来事に、こうした擬似出来事を上書きするのである。

テレビが視聴者を擬似的なものに導くとしたら、それはいかにしてであろうか。マスメディアに関する有名で重要な研究のいくつかはこの点を究明しようとしている。ここでは、三つの研究を挙げておきたい。

第一に、マーシャル・マクルーハン (McLuhan 1964) の「メディアはメッセージである」というあまりにも有名な定式に示される理論である。マクルーハンの用いる「メディア」とは文字通り媒介物であって、人間が用いる道具一般をさすが、それらは五感をはじめとする人間の諸能力を拡張するものである。カメラは目の、マイクは声の、ペンは手の、コンピューターは脳の拡張である。そして同時にそれらは、用いられると同時に、人間に一定の姿勢や態度や身体法や思考様式を要求することになり、ひいては社会環境に変化をもたらすことになる。テレビは、目と耳の延長として考えられる。テレビは、それを用いる人間の目が見えなかった映像まで見ることができるようにし、聞こえなかったものまで音として届ける。また、マクルーハンには、メディアに対して「精細度」(＝メディアが届ける情報の細かさ・密度) と「参加度」(＝メディア使用者の関与の度合い) という基準を設け、高精細度・低参加度のメディアを「ホットなメディア」、低精細度・高参加度のメディアを「クールなメディア」と呼んだ。マクルーハンによれば、テレビは後者、クールなメディアである。³⁾ テレビは、視聴者の目と耳を拡張し、同時に視聴者の関与を強く要求するメディアだということになる。

映画作家でもあり政治運動に深くかかわったフランスの思想家ギー・ドゥボールは、『スペクタクルの社会』(Debord 1967)、および『スペクタクルの社会についての注解』(Debord 1988)において、テレビをはじめとするマスメディアが席卷する社会において、視聴者としての生活者がスペクタクル(見世物)の観客の位置に強制的に送り込まれていることを指摘した。生活のすべてはメディア上の表象としてしか存在しなくなり、人々は徹底して受動的な消費生活をおくる。これは変貌した資本主義の形態なのであり、初期の資本主義において重要であった労働と生産をめぐる闘争はすでに意味を失っており、余暇と消費をめぐる闘争しか残されていないので、人々は保守的な中間階層と化してしまう。たとえ、テレビにおいて反体制的言説が語られたとしても、それはパッケージされたメディア上の情報であり、スペクタクル的資本主義の商品であるにすぎない。逆に、マスメディアが持つ権力は、それがあまりに広がって存在するため意識されなくなる。

フランスの社会学者ジャン・ボードリヤールは、商品がそれ自体で使用価値は持たなくなり記号として存在するようになった消費社会を分析するなかから、モノがすべて記号であり、互いの差異

によってのみ存在しうるような事態を指摘した。また彼は、ベンヤミンの「アウラの喪失」の議論を敷衍し、オリジナルとコピーの差異が消失した社会において、モノは模像 (simulacrum) として存在するしかないことを主張、現実と虚構との区別がもはや意味を持たない社会を「シミュレーションの社会」と呼んだ (Baudrillard 1981)。この議論を繰り返していた当時、湾岸戦争という大事件が起きたが、ボードリヤールはこの出来事が CNN の衛星放送でしか確認できないことから、「湾岸戦争は起こらなかった」という文章を書いた。テレビで編集された出来事は、それが起こっているとも起こっていないともいえないシミュラクルであり、テレビを知覚としてしまっている視聴者は、マスメディアの〈外部〉にある出来事にたどり着くことはできないのだ (Baudrillard 1991)。

これらの研究は、程度と力点の差はあれ、人間の知覚と現実認識に対するマスメディアの支配を問題にしている。⁴⁾ 支配の源泉は、マスメディアと視聴者の関係が閉じていること、この環世界には外部がなく、視聴者は外部があることを知らないということである。それゆえ、支配に対する批判の拠点となるのは、マスメディアの〈外部〉だということになる。⁵⁾

言語 (langue) を差異の体系として捉えるソシユール言語学にしても、言語の語彙の限界を人間の認識の限界として捉えるサピア＝ウォーフの言語相対性仮説にしても、言語に〈外部〉を設定することには否定的である。リップマンのように、「擬似」という語を用いるとしたら、擬似ではない「真正の」現実・環境があると考えることになる。しかし、人間が世界を、言語を通して認識しているとしたら、言語を超えた、あるいは言語の手前の現実・環境というものがあったとしても、それは対象化して思考することができないものであり、そのようなものを考えること自体が無意味だということになるだろう。同様に、知覚が知覚器官の構造によって限界を設けられていて、「物自体」を認識することができないというカント的立場に立つとしたら、ボードリヤールが述べるように、人間の知覚作用の延長であるマスメディアを超えて現実を認識できない、というよりもマスメディアの現実以外の現実はありえない、ということになるだろう。前述の三人の著作家は、こうした前提をある程度共有しているように思われる。

ところで、マクルーハンに従えば、人間の足の延長は自動車でもあれば新幹線でも飛行機でもある。視覚の延長は顕微鏡でも望遠鏡でもカメラでもテレビでもある (McLuhan 1964)。一つの知覚に対して一つのメディアが排他的に延長を担当しているわけではないのだ。新たなメディアの発明は、ある知覚を先有・専有していた既存のメディアに対する対抗的なメディアとなりうる。このような事態は、ネイティヴ言語に対する第二言語習得よりもはるかに簡便な過程を通してもたらされる。

とはいえ、こうした形でもたらされるものは、マスメディアの〈外部〉ではなく、新たなメディアを介した知覚や出来事にすぎないのではないだろうか。先行する支配メディアが、新着のメディアによる支配に交代しただけではないのだろうか。

しかし、たとえ支配権が新しいメディアに移っただけだとしても、対抗的選択肢が出現することは重要な変化である。唯一であるがゆえに他の選択肢の可能性が意識されない知覚が、可能世界の一つにすぎないと気づかれることになるのだから。ただもちろん、これまでテレビと他のマスメディア (新聞・週刊誌等) との対抗関係は存在してきた。これらが深刻な対立関係を生んできたかといえば、かならずしもそうではなかった。マスメディアそのものが対象になる場合を除けば、一方が他方の補足的な地位に甘んじるか (接近のしやすさによって、一般的には新聞・雑誌がテレビの補足的マスメディアになった)、視聴者・読者の分化を引き起こすかであった。しかしともあれ、

複数の知覚が存在することは、閉じた世界を開放することになる。出来事それ自体を捉えることはできなくても、提示された素材の選択と塑型、加工と編集、取捨選択と配列、解釈と評価に、他の可能性が存在するということを認識することができるようになるのである。

出来事に対して、マスメディアはデータの取捨選択と配列を行っている。製作者にとってこれらは、さまざまな制約のもとで要求されることであるにしても、いったん製作者のルーティンとなってしまうと、擬似出来事製作の制度と化し、普通は意識されないものとなる。出来事そのものではなく、それらが「擬似出来事」として構成されていくあり方を明らかにすることもまた、マスメディアの支配を解き放っていく有効な方法である。

視聴者が、出来事を解釈するための枠組は、コミュニケーション過程の研究においては、「スキーマ(schema)」「スクリプト(script)」と呼ばれる。これらは、マスメディアの視聴者・読者のみならず、日常会話においても用いられている。⁶⁾

視聴者・読者を擬似出来事に強力に巻き込んでいくのは、物語である。ウラジミール・プロップが『昔話の形態学』(Пропн1928)において、物語の構造を機能(プロットのパタン)と行動領域(登場人物)として分析して以来、物語が読者に、人や事象のステレオタイプ、すなわち「スキーマ」を、筋の展開に関するステレオタイプ、すなわち「スクリプト」を提供する装置であることが明らかにされてきた(Barthes 1966; Genette 1972; Adam 1984; Martinez and Scheffel 1999)。物語研究においてこれまでに開発され用いられてきた分析概念は、きわめて精緻で多岐に及ぶ。テレビドラマやドキュメンタリー番組のように、物語が顕在的であるようなものだけでなく、事実報道としてのニュースや、視聴者の興味をより惹きつけるように編集されたワイドショーで語られた言説を、会話データとしてではなく、意味の単位(Greimas 1966)として分析するのは、非常に有効な方法であるといえる。

他方、物語論は、読者が物語を読むという行為を発動することを前提とせざるを得ない。読者はいかにして、物語を読み始めるのか。テレビが語る物語も、(潜在的)視聴者がテレビを見る(このとき視聴者になる)という行動をとることで始まることが可能になる。ところが、読書が意識的な能動的な行為であるのに対して、テレビを見ることは半意図的の場合によっては習慣化された行為である。テレビを見る行為は決して受動的行為とはいえないが、それでも行為発動にかかる意志の量は少ないといえるだろう。したがって、テレビは視聴者を起動させ参加させるしきみを有することになる。マクルーハンが考えるように、テレビが低精細度であるがゆえに参加度が高まるという定式が正しいとしても、より高精細度になったテレビは参加度を低めてしまうことになり、それゆえ視聴者を起動する装置・ギミックが多数考案されなくてはならないのである。ワイドショーで用いられる「マスクング」(間山・山田 2013)、「有識者」を出演させることにより擬似-公共世界を作ること(稲葉 2016)などが挙げられる。物語構造が視聴者を受け手として措定するのに対して、これらのギミックは、視聴者を擬似的に参加させる。そこでは擬似的な会話が行われるのである。たとえば、事件報道の際にそのビデオを見ている出演者の顔が画面に小さく映し出される。これは、視聴者にとって自分以外にもテレビを見ている人の共在であり、小さな会話共同体をつくりだす。

マスコミュニケーション論の教科書は、マスメディアとパーソナルメディアとの違いとして、一方的な送り手であるかどうかを挙げて、マスコミュニケーションにおいては受け手からのフィードバックが弱いとしているのだが、このような特徴づけのせいで、ワイドショーなどにおける視聴者の擬似参加・擬似会話という観点は得られにくい。マスメディア、特にテレビが持つ読者(視聴者)設定機能、起動装置・参加装置の特定と擬似会話の分析はまだ始まったばかりというべきだろう。

対人的コミュニケーションにおいて、「出来事」がどのように構築されていくかということについては、語用論、社会言語学、談話分析、会話分析などによって研究の蓄積が存在する。マスメディアによる「出来事」の構築が、擬似参加者を作り上げることに拠るのであれば、これらの研究成果を生かすことも可能になるだろう。

3. 教育出来事報道の物語構造

擬似出来事は、物語作用を有するとともに視聴者の起動と参加を必要とすることを前節で述べたが、マスメディアが取り扱うジャンルによって起動・参加の容易さは異なる。ある特定の出来事ジャンルにおいては、視聴者の感情移入が比較的容易になされ、起動と参加がされやすいのである。それは、子どもと家庭と学校に関するジャンルである。かならずしもそれらすべてを包含するわけではないし外延が一致するわけでもないが、本稿ではこのジャンルを、「教育出来事」と呼ぶことにしたい。それがマスメディアを通して語られたもの、すなわち「教育報道」は「教育擬似出来事」ということになる。

では、なぜ教育出来事が、テレビ報道にとって格好の話題となるのだろうか。映像が、視覚的に視聴者の経験と共通感覚を呼び起こすものであるとしたら、視聴者にもっとも共有された経験と共通感覚は、学校と教育にかかわるものだからである。現在の日本において学校教育ほど、人々に共通経験をもたらしてきたものはない。生活様式や人生軌道が多様になり、それにともない価値観や意見や嗜好が多様になっている現代日本社会にあって、学校ほど人々に一定の期間強制的に共通の経験を強いたものはないからである。国家の安全保障にかかわる問題、日銀の金融政策、夫婦別姓の是非、タレントの起こした不倫騒動、スポーツの代表チームの評価、タトゥーをした人の温泉施設利用の是非、節分に恵方巻を食べるかどうかなど……ジャンルも違い、視聴者の経験と意見の量も違うようなこうしたトピックは、テレビ報道は視聴者の共有経験と共通感覚を確保できない。一面的な報道であるとして批判され、対抗言説を生み出すことと、視聴者に関心のないトピックとして見てももらえないこと、つまり視聴者の起動・参加に失敗することは、テレビが物語作用を喪失することであり、自らの存立基盤を危うくする事態である。したがって、前節で述べたように、物語装置を強力に作動させなくてはならないし、放映局によって物語のストーリーが異なるということが起こる。

ところが、学校教育にかかわる事柄だけは、視聴者の共通経験を期待できる。視聴者が国際政治や経済学の専門家・有識経験者であることは滅多に起こることではないのに対して、テレビの視聴者は、ほぼ必ず教育についての有識経験者なのである。学校教育が少なくとも戦後生まれの人々の人生において、きわめて類似したものとして経験されているがために、共通の感情も喚起しやすい。つまり、国民的な物語になりやすい。そして特に重要なのは、現在学校教育に携わっている人々でない限り、過去の「経験」が喚起されるという点である。フィスクとハートレーは、テレビの機能を分析するなかで、「想起」という意味の「アナムネシス (ἀνάμνησις)」の機能を指摘している (Fiske and Hartley 1978)。実際、物語は、過去に属するものを語ることである。過去の栄光と苦難、矜持と屈辱、歓喜と悲嘆を想起させるものである。

加えて、学校が「全制的施設」(Goffman 1961) 的な収容経験であることも、報道における教育出来事が一定の物語形式をとりやすい理由にもなっている。そこで語られる物語は、奪われた宝物

を取り返す冒険の物語や、宿命に翻弄される人々の悲しい話であるというよりは、隠されていた悪事をめぐる勧善懲悪の物語である。偶然に露見したり、死をもってそれを告発した人々によって暴き出されたりした悪事をめぐって、それを隠蔽してきた古いしきたり、それを利用する小悪党、悪事へと加担して墮落したかつての聖人、悪事を知って隠蔽してきた小心なあるいは狭量な人々、彼らにも知らされていなかった悪事の真の意図、全貌を知って利得を得ていた黒幕、黒幕に忠誠をもって仕えて働いていた影の組織、悪事によって不当に虐げられていた人々、悪事によって支配されるまでは続いていた平和、悪事によって失われあるいは奪われたアイテム。このような物語要素（機能・行動領域）のもと、物語となった教育の擬似出来事が産出される。たとえば、いじめ自殺をめぐる報道は、隠蔽する学校、教育委員会、いじめる生徒、失われた平和としての本来あるべき教育、墮落した聖人としての教師、といった物語要素が設定される。ただしそこには主人公が欠けている。なぜなら、主人公の座に指定されているのはこの場合、視聴者だからだ。テレビ報道は、主人公に悪事が起きたことを告げにやってくる情報提供者であり、主人公を補佐する者、主人公を導く賢者である。主人公とテレビはともに慨嘆し、ときに憤激し、ときに苦悩し、ときに歓喜に酔いしれる。不当に虐げられた人々の名誉回復をして追悼をし、悪事にかかわった者に鉄槌を下す。こうして視聴者は、物語からカタルシスを得ることができる。

しかし、これらは物語である。物語を読むことは、物語を読むことをいつかは止めることも意味している。物語としてのテレビの教育擬似出来事は、物語の外と関係せざるを得ない。

4. 擬似出来事の夢 / 現実構造

先述のような構造をもったいじめ自殺に関する報道が、連日のようにテレビに登場した時期に、視聴者に対して街頭インタビューをした研究者の一人は次のような報告をしている。

I: まず昨年度の、大津いじめ事件ではどこでどのように

男性: いやテレビのニュースでしょ?

I: ああやっぱりそうですか。たとえば、どういったことを記憶にあるってのは、ございますか?

男性: ああー、やっぱり隠蔽かな?

I: ああ、えっと学校の、隠蔽で、教育い……

男性: 教育委員会の、隠蔽かな。

I: たとえばいじめの内容については、なんかあったなーというのはありますか?

男性: それはきお、あんま記憶にない。

[2013年8月京都の街頭 初老の男性へのインタビュー, I: インタビュアー]

(稲葉 2016)

頻繁なテレビ報道が、このような断片的な記憶しか残さないとは、にわかには信じることができないことのようにも思える。しかし、教育擬似出来事が物語であるとすれば、きわめて当然のことでもある。

物語は、読まれているときと、読み終わったときとで、経験の構造を変える。アルフレッド・シュツが多元的現実論で述べるように、経験は「限定的意味領域」として内部で、そして内部でのみ一

貫性を有している (Schutz 1962)。

一つの現実が他の現実に移行するとき、そこでの経験は、曖昧に要約され多くは忘却される。物語が「想起＝アナムネシス (ἀνάμνησις)」の機能を持つのと対照的に、物語の外で物語は「忘却＝アムネシア (αμνησία)」として現われることになる。

このように、擬似出来事が限定的意味領域を形成していることを踏まえると、擬似出来事のより具体的な特徴を指摘することができる。シュッツは、多元的現実を構成する現実の一つとして夢を挙げている。夢の特徴がすべての限定的意味領域に妥当するといえないが、擬似出来事の構造を明らかにする際に有益であると思われる。ここで検討するのは、当然のことながら、フロイトの夢についての研究 (Freud 1972: 原著 1900) である。

フロイトは、無意識を検討するなかで、夢の構築のされ方を明らかにした。⁷⁾ まず、夢とは、顕在内容 (夢内容) としての夢と、潜在内容 (夢思想) としての無意識要素とを持つ。無意識は、覚醒時において、抑圧という装置＝作業によって、「なかったことに」されているものである。無意識の内容は、構築された自我を脅かしかねないものなので、抑圧はこの内容を意識上に上らせないよう検閲を行っている。しかし、睡眠時においては、この抑圧の力は低下するとされ、その結果、無意識の要素が解放されることになる。とはいうものの、抑圧は弱まりながらも、検閲を行うので、その結果、無意識の内容は、圧縮と置換という二種類の加工を一方または両方にわたってされることになる。これが夢作業 (Traumarbeiten) と呼ばれるものであり、無意識の内容は夢の素材となる。圧縮は、無意識の要素に別の要素を加えることで、判別ができないようにするものであり、置換は無意識の要素を直接関連のない別の要素に置き換えることである。

夢をモデルに物語作用を持つ擬似出来事を説明しようとするとき、このような分析の適用とは深層の構造を想定することでもある。限定的意味領域がすべて深層構造を有すると考えることは理論的な困難をともなう。もちろん、擬似出来事に対する出来事が、夢に対する意識に対応すると考えることはできるかもしれないが、単なるアナロジーを越えた理論化はかなりの慎重な手続きを要する。ここでは、むしろ、精神分析の理論ではあまり注目されない部分を取り上げることにする。

フロイトは夢の深層分析を行う前に、顕在内容を構成する夢の素材を挙げている。①直近のものと些末なもの、②幼年期のもの、③身体的源泉 (睡眠時の姿勢からくる感覚印象など)、④類型夢である。①～③は経験に属するものである。③は現在の経験、②は「日中残滓物」といわれる覚醒時における最近の経験の記憶ないしは本人としては記憶にとどめたつもりもない経験、②は幼児期の経験であるがもちろん比較的遠い過去の経験も含まれる。④としてフロイトが挙げている事例を参照してみよう。(α) 裸で困惑する夢 (露出夢)、(β) 近親者が死ぬ夢、(γ) 試験の夢である。⁸⁾ もちろん、類型はこれで尽きるわけではないが、夢の素材として類型化された緊張状況が挙げられている。したがって、先の物語作用と共通する点は、経験の想起と類型化されたシークエンスだということになるだろう。

さらに、夢には、副次的な作業も存在している。その一つが、形象性への配慮であり、本来視覚情報ではない夢思想を、夢を「見る」こととして、視覚情報に還元する作用である。「新聞の政治的な社説を絵で表すとなると難しいのと同じように、夢の呈示にとっても抽象的表現は難しい」 (Freud 1972 訳書 80) 具象的なものへの翻訳こそが、それだけでは一種の混乱でしかない夢思想が夢として構築されるものなのである。もう一つは、二次加工といわれるものである。これは、さまざまなエピソードの、連想ですらないような羅列を、検閲が一つのストーリーを持ったものとして覚醒時に整序する作業である。「覚醒時思考にとっては、知覚素材において秩序を創設し、諸関係

を設定し、それを何らかの理解可能な連関から来る予期の許に置くということは、理の当然である」(同上 279)。

フロイトが『夢解釈』の最後に近い部分で述べる夢忘却は、物語作用の働きについても対応が存在している。夢は覚醒時に忘却され、断片となってしまう意味不明なものになるとフロイトは述べている。断片はイメージ(形象)であったり、関係性の骨格だったり、理由不明の情動だったりする。フロイトはこのような忘却を検閲の作用と考えているが、多元的現実としての観点からは、当該現実の内部での意味連関が別の現実では失われてしまうからと考えることができるだろう。夢の場合、記録媒体である意識自体に、特定の規制がかかっているために忘却が生じる。しかし、視聴者のテレビの経験は、DVDなどの媒体への記録が可能である。とはいえ、視聴者がそのような記録を日常的に残すことは(研究者でもない限り)起こらないし、もし記録していたとしても、すでに結末を知っている物語を読み返すときのように、別の情報が付加されたり同一の視聴環境になかったりして、あとで見返すことで完全に同じ物語の中に入ることはすでにできなくなっている。であるから、忘却は常に起き、先に紹介した視聴者のような物語の残骸だけをあとに残して去るのである。

5. 夢の醒め方—対抗的・交渉的言説空間の出現—

夢はどのようにして醒めるのだろうか。これはフロイトが論じるころではなかった。シュツツも、一つの現実から他の現実への移行がなぜ起こるかは論じているわけではない。夢を醒ましたり、至高の現実(paramount reality)としての日常的現実へと移行させたりするものは、夢や当該現実自体に属していないのが普通であろうが、夢と当該現実自体の苦痛が大きい場合には、覚醒や移行が起きると考えることもできる。

ともあれ、夢も物語もテレビの擬似出来事も常に終わる。ところが、夢や物語が別の物語を見せているときに、テレビの視聴者は再び類似した物語を見ているということが起きる。テレビが視聴者を参加させるメディアであるがゆえに、テレビの擬似出来事の物語作用はより強力だということがいえるだろう。

けれども、夢とテレビがもう一つ異なるのは次の点である。睡眠時の夢には、夢ではない「メディア」は存在していない(少なくとも知られていない)。これに対して、テレビには、別のメディアが存在している。第2節で述べたように、競合メディアは新着するのである。物語作用という面から見た場合、このような新着競合メディアは、擬似出来事構築にどのような影響を与えるのだろうか。

日本においては1960年代に普及したテレビというマスメディアの君臨は、インターネットを媒介にしたさまざまなコミュニケーション形態、電子ネットワークコミュニケーションが可能になることで終わりを告げつつあるといえるだろう。というのも、電子ネットワークコミュニケーションは、パーソナルメディアでもあり、焦点の定まらない相互作用(Goffman 1963)における他者とのパーソナルコミュニケーションでもあり、またマスメディアでもある。このような複合的な側面を実現したメディアが、今後単一型のメディアへと退化することはカストロフ的な出来事がない限り考えられない。電子ネットワークコミュニケーションは、マスメディア限定型のメディアを駆逐してしまった。その結果、テレビは最後のマスメディアとなったといえるだろう。

ただし、「2015年国民生活時間調査」(NHK放送文化研究所2016)⁹⁾からは、テレビの覇権は終

わっていないこともわかる。テレビを見る人の割合である「テレビ行為者率（全体）」（1日15分以上テレビ視聴をする、ただしワンセグによる視聴も含む）は、1995年に92%であったが、2015年には85%であった。しかし、これを年齢層で見た場合には、2015年に60歳代・70歳代（女性の場合はこれに50歳代が加わる）が1995年から2015年の20年間でほとんど変化がないのに対して、他の年齢層は2010年を境にしてその割合は急激に落ち込むのである。他のメディアへの接触にはさまざまな制約の存在する10代を除けば、若い年齢層ほどテレビ行為者率が低い（男性の場合、40歳代が76%、30歳代で69%、20歳代で62%、女性ではそれぞれ85%、81%、75%）。これらの年齢層のほとんどで、20年間の落ち込みは15~20%である。世代別に捉えるならば、1995年に20代であった男性は低いまま横ばいであるのに対して、1995年に10代の男性において20%、10代と20代の女性においては10%程度減少している。すなわち、年齢の進行によってそれだけテレビを見なくなっている。

減少分がすべて電子ネットワークコミュニケーションに転換したと断言できないかもしれないが、たとえばテレビをまったく見ない20代の男性が現在4割いるということ、しかも残りの6割にしても皆が報道番組を視聴しているとは断言はできないということ、20年間の趨勢からテレビ視聴者が今後も着実に減っていくと予想されることは、本稿が検討してきたテレビの擬似出来事の物語作用に影響を与えずにいないことは明らかである。そして、世代間で差異が目立つことから、上の世代ほどテレビの影響力が保たれたままであるが、近い将来においてテレビの影響力を受けない世代が大多数を占めることも明らかである。その場合、妄信状態にあるとしても批判するにしても、テレビの影響力を信じるかどうかということは世代間での争点になるであろう。

電子ネットワークコミュニケーションがテレビとどのような関係を有するかについては、前者が依然として発展途上にあるため、その全貌を体系的に述べるのは難しい。本稿ではいくつかの点を指摘することにしたい。ここで重要な観点になるのは、スチュアート・ホールの解説の三類型である（Hall 1980）。ホールは、マスメディアの受け手が行う解説の方式に三つの類型を区別した。①ヘゲモニックな解説。受け手は送り手の意図通りに情報を解説する。テレビの視聴者が、テレビの擬似出来事を物語として解説することがこれにあたる。②対抗的な解説。受け手の意図に対して、それに対立する観点から解説する。③交渉的な解説。受け手は送り手の意図とは無関係な意味連関を発見して、それによって新たな解釈を作り上げる。ホールの論文は、非常に短いものだが、現代のマスメディア研究に与えた影響はきわめて大きい（佐藤 1990；山腰 2012）。

酒井・越智他（2016）においては、次のような事例が報告されている。女性教師が自身の子どもの入学式に出席するために、担任であったにもかかわらず勤務校での入学式を欠席したことをめぐってワイドショーで報道がされた。しかし、ワイドショー製作者は、このような情報を、インターネットの書き込みから仕入れていた。そして、教育的な使命にプライベートなことを優先させる教師として、教育出来事についての物語を作り、放送した。これは、次々に他のテレビマスメディア、そしてインターネットにも拡散した。これに気をよくした製作者は、教師が授業を休み、のど自慢に出場した、という教育出来事をインターネットの書き込みから仕入れた。ところが、こちらはうまく物語にすることはできず、他のメディアにも拡散はせず、以後のワイドショーでも取り上げられることはなかった。

このエピソードから、テレビと電子ネットワークコミュニケーションが、互いに参照する関係を有していることがわかる。このエピソードでは、前者が後者を情報源として参照することが起きているが、このような例としてほかにも、動画サイトにアップロードされた個人撮影の動画を、テレ

ピが特集して放映することが挙げられる。

このようなテレビの参照に対して、電子ネットワークコミュニケーションは、ホールの述べる対抗的な読みや交渉的な読みをもって対応する。テレビが提供する物語は、書き込みサイトなどで、少数者の対抗的によって批判されると、それがさらに多様な読みを誘発する。また、パロディを施したり、まったく別の文脈を付加したりすることが起こるのである。

テレビ視聴率の低下のデータからもわかるように、テレビが〈外部〉を有していなかった時代は、すでに終わりを告げつつある。教育にかかわる擬似出来事もまた、その物語としての性格を露わにされつつある。

電子ネットワークコミュニケーションについては、確かに一種の病理現象も報告・指摘されている（2ちゃんねるの書き込みにおける誹謗中傷、ブログ炎上、学校裏サイト、ネットいじめ、SNS疲れ・SNS依存、バカッター、ネトウヨ・ネティズン、ネット私刑、リベンジボルノ、総称的にサイバーカスケードと呼ばれる現象）。また、電子ネットワークコミュニケーションが、インターネット資本主義として欲望を喚起し生産していくことも知られている（フィルタリング、グーグルのアルゴリズム＝ページランク的方式）。電子ネットワークコミュニケーションによって、人々が「動物化」され、分断されている面も見逃すべきではないだろう。テレビ行為者率の低い世代の政治的イリテラシー化にもたらす影響は、テレビ以上であるといえるだろう。テレビが最後のマスメディアであると述べたが、逆に、テレビ行為者率の高い世代にとっては、電子ネットワークコミュニケーションが依然としてテレビの代替物、より便利でより資本主義的なテレビでありつづけていることも指摘できるだろう。¹⁰⁾

しかし他方で、電子ネットワークコミュニケーションがもたらす言説空間は、アーレントが人間の「活動」の典型として述べた古代ギリシアのポリスの言論（Arendt 1958）や、ハーバーマスが18世紀に成立した公共圏として叙述したもの（Habermas 1962）に類似している、少なくとも思い出させることも確かなのである。スマートモブズやサイバーカスケードの正の機能のみを取り上げて見せる過剰な評価は禁物であるし、電子ネットワークコミュニケーションがより深く目に見えない管理を排して市民構築のツールとなるためには、精緻なアーキテクチャの慎重な構築が必要となるだろうが、それでも、テレビというマスメディアが、独占してきた擬似出来事と物語の空間を相対化し、（対抗的読解のみならず交渉的読解を含む）対抗的言説空間を出現させたことは認めてもいいのではないだろうか。特に、交渉的な読解による言説空間の可能性については、また稿を改めて論じられなくてはならない。

註

- 1) 本稿で論じることが可能なことの域を超えているので、十分な言及ができなかったサブリミナル効果、現実の培養効果をはじめとする視聴者の知覚・認識作用にかかわる社会心理学研究については、（三浦他 2007）を参照。
- 2) 翻訳では「擬似イベント」となっているが、「イベント」は、現代においては「催し事」の意味で用いられることを考慮するとともに、ブーアスティンに含まれる「擬似ではない真実」というニュアンスからの差異化をはかって、本稿は「擬似出来事」という語を用いる。
- 3) テレビが低精細度なメディアだという評価は、当時のテレビの解像度が低かったことによるとされることが多いが、全体にマクルーハンの論述はアカデミックなスタイルとはかけ離れており、これも恣意的な評価なのかもしれない。

- 4) 視覚イメージが体験を支配することは、ジャック・ラカンが幼児の鏡像体験について考察していること (Lacan 1966) に関連づけることができる。鏡に映った「自分」の像は、現実の、生きられた主体である幼児の内的感覚 (「寸断された身体」) を統合し単純化して提示してくれるものである。鏡像段階 (生後 6 か月～1 歳半) の幼児は、鏡像との間に一種の契約を結ぶのであるが、それによって、自らの生きられた身体としての主体 (sujet) は、虚像としての鏡像に騙取され、主人に対する奴隷 (sujet) の関係へと転落する。生きられた現実の、編集された現実への従属の原型が、このような鏡像の経験に見ることができ、スラヴォイ・ジジエクはこのような枠組をもって現代文化を分析している (Žižek 1989; 1991)。
- 5) 言語やメディアによって加工されない「真の出来事」が、言語やメディアの「外部」に存在していて、それが批判の拠点になる、という主張を本稿で行うわけではないのは以下で述べるとおりである。ただし、言語やメディアの外部に何も存在しないと考えることもまた滑稽な極論に陥るのもまた自明である。なぜなら、何が起きていると言ってもいいことになるし、我々は何について語っているのかがまったくわからなくなるからだ。したがって、ここで行うのが、「真の出来事」を想定せずに、しかし、言語やメディアの「外部」を、可能世界として想定するという作業であるのは、本文で述べるとおりである。なお、ベルクソンの哲学を援用しながら、出来事に迫ろうとする哲学を展開したのが、ジル・ドゥルーズ (Deleuze 1969 など) である。マスメディアの外部に迫る議論として今後検討を要する。
- 6) たとえば、会話分析の代表的な研究として、サックスは子どもが話した会話を分析して、指示されないものを関連づける「成員カテゴリー化装置」の存在を指摘している (Sacks 1974)。
- 7) 現代における脳科学や、睡眠時の生理学的な研究によって、フロイトの夢理論がまったく時代遅れで無意味なものになったと考える人々もいる。しかし、ここで述べたように、フロイトの夢理論は、限定的意味領域の構造を明らかにする理論として有意義だと考えるべきなのである。
- 8) フロイトは、先に述べたような無意識の内容に対する加工の議論をしたうえで、類型夢としてこれ加えて、性的・性交的に理解される象徴夢について述べている。世間でスキャンダラスな議論として知られるフロイトの夢分析は主としてこの部分によっている。類型夢の分類ではないが、この後で「荒唐無稽な夢」というものをフロイトが論じていることも注目値する。なぜなら、多元的現実を構成する限定的意味領域は、他の現実から見た場合、たいいてい荒唐無稽だからである。
- 9) 住民基本台帳から層化無作為二段抽出法によって選ばれた 10 歳以上の日本国民 1 万 2600 人を対象に、2015 年 10 月 13 日から 26 日にわたり配布回収法によるプリコード方式で実施。有効回答数は平日分が 1 万 1056 人分。土曜日分・日曜日分はそれぞれ 3600 人に対し行われ、有効回答数はそれぞれ 2195 人分・2170 人分。
- 10) 本稿では、テレビに対して電子ネットワークコミュニケーションの意義を論じることが目的であった。しかし、近年の政治的権力によるとされる特定のテレビ番組への、あるいはマスメディア全般に対する「圧力」を思い合わせると、第四の権力として政治権力を批判するものとしてのテレビの政治的意義も強調しておかなくてはならない。しかし現代では、このスタンスは、市民的言説の場を提供するというより、福祉国家に依存する民衆の要望を代弁するものとなり、(行政) サービス的な色彩を強めるものとなっている。テレビの問題は、世論を操作していることにあるのではなく、視聴率に従属することで、視聴者の欲望を先取りし、政治的なもの (多種多様性の衝突、ルール構成をめぐる対話) を消滅させ、これを福祉国家による奉仕の要求 (クレーム) の問題に転換させるポピュリズム的性格にある。

文献

- Adam, Jea-Michel, 1984, *Le récit*, Presses Universitaires de France. (=2004, 末松壽・佐藤正年訳, 物語論 プロロップ からエーコまで, 白水社 [文庫クセジュ].)
- Arendt, Hannah, 1958, *The Human Condition*, University of Chicago Press. (=1994, 志水速雄訳, 人間の条件, 筑摩書房 [ちくま学芸文庫].)
- Baudrillard, Jean, 1981, *Simulacres et Simulation*, Galilée. (=1984, 竹原あき子訳, シミュラクルとシミュレーション,

- 法政大学出版局.)
- Baudrillard, Jean, 1991, *La guerre du golfe n'a pas eu lieu*, Galilée. (=1991, 塚原史訳, 湾岸戦争は起こらなかった, 紀伊國屋書店.)
- Barthes, Roland, 1966, "Introduction à l'analyse structurale des récits", *Communication*, 8. (=1979, 花輪光訳, 物語の構造分析序説, 物語の構造分析, みすず書房, 所収, 1-54 頁.)
- Boorstin, Daniel Joseph, 1962, *The Image: A Guide to Pseudo-events in America*, Atheneum. (=1974, 星野 郁美・後藤和彦訳, 幻影の時代 マスコミが製造する事実, 東京創元社.)
- Bourdieu, Pierre, 1996, *Sur la Télévision*, LIBER. (=2000, 櫻本陽一訳, メディア批判, 藤原書店.)
- Debord, Guy, 1967, *La société du spectacle*, ChampLibre. → 1992, Gallimard. (=2003, 木下誠訳, スペクタクルの社会, 筑摩書房 [ちくま学芸文庫].)
- Debord, Guy, 1988, *Commentaires sur la société du spectacle*, Gérard Lebovici. → 1992, Gallimard. (=2000, 木下誠訳, スペクタクルの社会についての注解, 現代思潮新社.)
- Deleuze, Gilles, 1969, *Logique du sens*, Minuit. (=2007, 小泉義之訳, 意味の論理学, 河出書房新社 [河出文庫].)
- Fiske, John and John Hartley, 1978, *Reading Television*, Methuen. (=1991, 池村六郎訳, テレビを〈読む〉, 未来社.)
- Freud, Sigmund, 1972, "Die Traumdeutung", in *Sigmund Freud Gesammelte Werke*, S. Fischer Verlag. (=2011, 新宮一成訳, 夢解釈Ⅱ (フロイト全集5), 岩波書店.)
- Genette, Gérard, 1972, *Figures III*, Seuil. (=1985, 花輪光・和泉涼一訳, 物語のディスクール, 書肆風の薔薇; 1987, 天野利彦・矢橋透訳, フィギュールⅢ.)
- Goffman, Erving, 1961, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Hospitals and other Inmates*, Doubleday Anchor. (=1983, 石黒毅訳, アサイラム 施設被収容者の日常世界, 誠信書房.)
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on Social Organization on Gatherings*, The Free Press. (=1980, 丸木恵祐・本名信行訳, 集まりの構造 新しい日常行動論を求めて, 誠信書房, 誠信書房.)
- Greimas, A. J., 1966, *Sémantique structurale*, Larousse. (=1988, 田島宏・鳥居正文訳, 構造意味論, 紀伊國屋書店.)
- Harbermas, Jürgen, 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied. → 1990, Suhrkamp Verlag. (=1973 → 1993, 細谷貞雄・山田正行訳, 公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探究, 未来社.)
- Hall, Stewart, 1980, "Encoding/Decoding" in S. Hall, D. Hobson, A. Lowe and P. Willis eds. *Culture, Media, Language*, Routledge, 128-138. (→ 1993, Simon During ed., *The Cultural Studies Reader*, Routledge, 1993, 90-103.)
- 稲葉浩一, 2016, 「大津いじめ問題」報道の仕掛け—社会問題化における〈有識者〉の用いられ方に着目して—, 第3回合同研究会報告資料 (未公刊).
- 加藤隆雄・越智康詞, 2014, 現代社会における市民性教育の困難と可能性—グローバル市場時代における「政治的イリテラシー」に抗して—, アカデミア 人文・自然科学編 第9号, 南山大学, 1-19 頁.
- Lacan, Jacques, 1966, "Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je", in *Écrits*, Seuil. (=2000, 宮本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次訳, エクリ I, 弘文堂, 所収, 123-134 頁.)
- Lippmann, Walter, 1922, *Public Opinion*, Harcourt. (=1987, 掛川トミ子訳, 世論 (上・下), 岩波書店 [岩波文庫].)
- Martinez, Matias and Michael Scheffel, 1999, *Einführung in die Erzähltheorie*, C. H. Beck. (=2006, 林捷・末長豊・生野芳徳訳, 物語の森へ 物語理論入門, 法政大学出版局.)
- 間山広朗・山田鋭生, 2013, いじめ問題の諸相 (2) —「大津いじめ自殺」事件のテレビ番組分析の可能性—, 日本教育社会学会 第65回大会 (2013年9月22日) 報告資料.
- McLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: the Extensions of Man*, Polity Press. (=2000, 栗原裕・河本仲聖訳, メディア論 人間の拡張の諸相, みすず書房.)
- 三浦麻子・森尾博昭・川浦康至編, 2007, インターネットの心理学 個人・集団・社会, 誠信書房.
- NHK 放送文化研究所, 2016, データブック 国民生活時間調査 2015, NHK 出版.
- Пропп, Владимир Яковлевич, 1928, *Морфология сказки*, Academia. (=1987, 北岡誠司・福田美智代訳, 昔話の形態学,

水声社.)

Sacks, Harvey, 1974, "On the Analyzability of Stories by Children" in R. Turner ed., *Ethnomethodology*, Penguin, pp. 216–232.

酒井真由子・越智康詞・紅林伸幸・加藤隆雄, 2016, テレビのメディア・バイアスと教育世論の形成—教員報道 / 少年報道から見えてくるもの—, 信州大学教育学部研究論集 第9号, 27–47頁, 信州大学.

佐藤毅, 1990, マスコミの受容理論 言説の異化媒介的変換, 法政大学出版局.

Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers 1. The Problem of Social Reality*, Maurice Natanson ed., Martinus Nijhoff. (=1985, 渡部光・那須壽・西原和久訳, アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題 [Ⅱ], マルジュ社.)

山腰修三, 2012, コミュニケーションの政治社会学—メディア言説・ヘゲモニー・民主主義—, ミネルヴァ書房.

Žižek, Slavoj, 1989, *The Sublime Object of Ideology*, Verso. (=2000, 鈴木晶訳, イデオロギーの崇高な対象, 河出書房新社.)

Žižek, Slavoj, 1991, *Looking Awry: An introduction to Jacques Lacan through popular culture*, MIT Press. (=1995, 鈴木晶訳, 斜めから見る 大衆文化を通してラカン理論へ, 青土社.)

本研究は、科学研究費（基盤研究（A）課題番号 25245075「テレビメディアにおける言説・映像空間の特性と教育世論の形成に関する実証的研究」平成25年度～29年度）の助成を受けている。